

【特集】 情感性概念の応用的拡張（ポール・オーディ来日記念）

まえがき

伊原木 大祐

今号の特集は、2023 年度に京都大学文学部校舎の第一講義室で開催された「情感性研究会」における発表記録の一部である。本研究会は、科学研究費補助金・基盤研究（C）「情感性概念の応用的拡張——アンリ哲学研究の新展開」（23K00008）の助成に基づくものであり、フランスの哲学者ミシェル・アンリによる情感性の概念を主要な検討対象としている。アンリが構想した「生の現象学」は、あらゆる超越や表象を排した「内在」の探究に焦点を当てていたため、ともすれば内に閉じた思考と見なされ、さまざまな外部の問題には応用しがたい理論として忌避されてきた感もある。本研究会の意図は、こうした先入観を覆し、これまで国内外の研究ではほとんど検討されてこなかった「生の現象学」の応用的パースペクティブを切り拓く点にある。このため、毎回ゲストスピーカーを招き、アンリ研究全体の視野を拡張することを目指してきた。今年度の発表題目は以下のとおりである。

第二回 情感性研究会（2023 年 12 月 23 日 14:00～17:00）

川瀬雅也「他者経験としての自己感受——アンリと現象学的精神病理学」

伊原木大祐「情感性と自己感——アンリからスターンへ」

塩飽千丁「ある崇高の瞬間についての事例研究」

第三回 情感性研究会（2024 年 2 月 12 日 11:30～18:00）

笠松和也「自己感知の本源性の起源について」

Masataka Muramatsu : Philosophie henryenne comme exercice spirituel（村松正隆「精神の修練としてのアンリ哲学」）

Masami Komemushi : L'affectivité trans-subjective（米虫正巳「超 - 主観的な情感性」）

Paul Audi : La « réalité » du sentiment selon Michel Henry（ポール・オーディ「ミシェル・アンリによる感情の『実在性』」）

上記のうち、情感性研究会のコアメンバーである川瀬氏・村松氏・米虫氏による発表内容は別途出版の予定があるため、残念ながら本特集での掲載はかなわなかった。

他方、ゲストスピーカーの塩飽氏・笠松氏・オーディ氏からは、それぞれの論考をお寄せいただくこととなった。

塩飽千丁氏は、大阪大学大学院基礎人間科学講座で哲学を、京都大学大学院教育学研究科で臨床教育学を学んだ後、臨床心理士の資格を取得している。哲学・思想研究を継続しつつ、臨床心理士としてさまざまな現場で臨床活動を実践しており、現代フランス哲学、精神分析、精神病理学にも精通した研究者である。

笠松和也氏は、東京大学大学院人文社会系研究科で特任研究員を務めた後、「自己知の倫理学——スピノザ『エチカ』における欲望と神への愛」で東京大学より文学博士号を授与されている。現在は日本学術振興会特別研究員 PD として九州大学大学院人文科学研究院に所属し、デカルトやスピノザをはじめとしたフランスの哲学史・感情史について幅広い考察を展開している新進気鋭の研究者である。

ポール・オーディ氏は、1963年にレバノン生まれ、75年にフランスに帰化した哲学者である。高等師範学校を卒業後、パリ・ソルボンヌ大学にジャン＝ジャック・ルソーに関する論文を提出し、博士号を取得している。ミシェル・アンリの哲学から多大な影響を受けつつ、美学＝感性論と倫理の交差において（これを氏は「感性／倫理 l'esth/éthique」と名づける）創造的生の意味を思考してきた。ルソーに関する複数の研究書以外にも、ニーチェ、マラルメ、ラカン、ロマン・ガリーなどに関する著作がある。近著に『自由・平等・単独性——遺産としてのルソー』（2021）、『厄介なアイデンティティ』（2022）があり、邦訳としては川瀬雅也訳『ミシェル・アンリ——生の現象学入門』（勁草書房、2012年）が刊行されている。このたびのオーディ氏招聘は、訳者である川瀬氏が仲介役となり、米虫氏を研究代表者とする科研費・基盤研究（C）「出来事と実在性の現象学に関する日仏共同研究」（20K00046）の助成によって実現した。オーディ氏は上に記した第三回研究会でのシンポジウム発表のほか、二日後の2月14日には東京の成城大学で「Compassion et affectivité（同情と情感性）」と題された講演会を行っている。会場利用にあたっては、成城大学の村瀬鋼氏にご尽力いただいた。

以下、特集号の掲載は新しいものから順に並べている。

1. ポール・オーディ（訳：笠木丈）「ミシェル・アンリによる感情の『実在性』」
2. 笠松和也「自己感知の本源性の起源について」
3. 塩飽千丁「臨床心理士として仕事をしているときに経験した情感性は、どのように書けば迫真性をおびて伝わるだろうか」
4. 伊原木大祐「情感性と自己感——アンリからスターンへ」

なお、塩飽氏の発表原稿中には一般公開できない症例の記述が含まれていたため、特集向けに新たなエッセイを書き下ろしていただいた。これ以外はすべて、研究会当日の発表テキストそのままである。また、オーディ氏に関わる翻訳・通訳については、ベルクソン研究者でもある笠木氏にご尽力いただいた。本特集にご寄稿いただいた方々には重ねて御礼申し上げます。